

忘れた伊予の高嶺石鎚山

石鎚講の成立と展開(1)

西海にしがい
賢二

(1) 法螺を吹鳴します。初めての雌の法螺に挑戦（石鎚山に入峰してみよう）

私の師匠は大学教育ではなく慶應三年（1867）・明治二十四年（1891）・大正五年（1916）の女性たちからの伝承（聞き書き）が基礎になっている。

その他「菅江真澄」という人の現地調査による「音」に注目したことが引き金になっている。「菅江真澄は、不図ある音を耳にする」。それは「法螺貝を吹き鳴らす音が聞こえたので、修行している山伏のものかと思つたら子供らが、周囲六・七寸もある山路の莖の両方を切つたものを吹いて歩いてゐた。旅の一シーンであつたが、その子供の姿を丹念に描き、図会として残した。北の自然と共に人間のおおらかな姿を見出したのであろうか。一般化されていないが、とうるかこの視点を基に柳田國男は民俗学に注目したと言われているが、あえて紹介しない事実が潜んでいる。例えば定使・定夫に関わつ

てその一例を紹介して見ましょう。

(2) 貧しいけれど勤勉で善良で、時には頑固でずるいところもあるが、とにかく精いっぱい生き、しかも平凡に死んでいく人たちである。がその人たちにも歴史はある。一人一人の歴史があるばかりでなく民衆そのものの歴史がある。しかし本当は発掘されていない。しかもその人たちによって文化は発展してきたのである。宮本常一「民衆の歴史を求めて」『民俗学のすすめ―日本の民俗』(1965年12月、宮本常一が西条市の現在の西之川・東之川さらにその後高知県の寺川(現・高知県の町)すなわち石鎚修験道や四国遍路の方々が歩いた時の紹介をしてみたい。

瀬戸内沿岸における石鎚講の展開

 $\hat{=}$

石鎚信仰の諸形態をその実態からみると、松山市周辺に顕著にみられる「お山講」、さらに同周辺で行われている金石常夜燈をめぐる行事、そしてお山開き中に行われる、石鎚山登拜、その他石鎚を勧請しての祭祀、南予地方に顕著にみられるお山踊りなどに分けられることができるであらう。しかし、それぞれの行事が独立して行われているものは少なく、多くの場合五つの行事が相互に行われセツトとして行われている。

入会受付について

入会は随時受付し希望者は、事務所に葉書にて、住所、氏名、電話番号を連絡の上、本会の郵便振込口座（〇〇二八〇一九一二七九〇）に一年会費一〇〇〇円を振込み下さい。

石鎚山を信仰する諸集団を一般に「石鎚講」と称している。ところが松山市周辺では、石鎚講よりも「お山講」と称しているところが多い。管見の限りで採取している事例をいくつか紹介して見ると、愛媛県松山市周辺、同県宇和郡城川町（かつて愛媛県の南部に存在した町。2004年4月1日に東宇和郡の他の町とともに合併し、自治体としての城川町は消滅した・現西予市）、同県八幡浜市中津川、同県大洲市周辺、大分県蒲江町深島（現・大分県佐伯市蒲江）・屋形島（現・などでは大分県佐伯市蒲江大字蒲江屋形島）などでは一般に「お山講」と称している。

松山市周辺でのお山講は、温泉郡重信町上村（現・東温市）・松山市津吉町・米野々（米野町）・東川・伊予郡松前町中川原などがある。このほかにも道後周辺では広い地域で行われていたようだが、昭和三十年頃にはほとんど消滅してしまった。お山講の行われている旧重信町上村・牛淵（現・東温市）、松山市津吉町は旧松山藩領で近接しており、さらには道後の中心的な穀倉地帯でもある。また、松山市米野々と東川は、松山市街の東北に位置し、石手川の上流に形成された地区で、どちらも山間部にある。

お山講の期日は、正月・五月・九月の三回行われている。ただ、東温市の上村と松山市